2009年度授業改善研修参加レポート　所属（国際コミュニケーション学部）氏名　加納寛

「研修会等名称」
東南アジア教育に関する高大連携研究会

場所：東京外国語大学
期間：1 月 31 日

１．研修の内容

13 時に開会され、当初、大阪大学の桃木至朗教授より、「大学教養課程で教える東南アジア通史」と題した授業実践報告が行われた。

それに引き続き、14 時より千葉大学の岩城高広准教授より、自身の授業実践報告をも含めたコメントがあり、14 時 25 分から質疑応答が行われた。報告者を含め、多くの質問やコメントが出され、あっという間に予定時間が経過した。

15 時 5 分より 10 分間の休憩をはさみ、大阪府高等学校教諭を長年務めてこられた芦屋女子短期大学の中村薫教授より、「高等学校での世界史授業における東南アジア」に関する高校教員へのアンケート結果の中間報告が行われた。引き続き質疑応答・討論が 15 時 50 分より行われ、報告者を含めて活発な議論が行われた。

16 時 10 分、議論を終了し、プロジェクトの今後の展開に関する打合せが実施され、東南アジア教育をめぐる高大連携について、どのような活動を展開していくべきであるかの討論がなされ、17 時 10 分閉会した。

その後、参加者間での懇親会が実施され、引き続き高等学校及び大学における東南アジア教育をめぐって意見交換が行われた。

２．研修の成果

まず第一に、他の大学教員による東南アジア教育が、教養課程や専門課程の講義においてどのように実践されているかを知ることができたことが挙げられる。特に桃木教授の発表では、実際に使用されているシラバス、配布レジュメ、パワーポイント・ファイル、小テスト、期末試験の例が示され、大いに参考になった。一方、電子版のシラバスは、本学同様、どこまで受講生に浸透しているかについての疑問が残る等の問題意識も共有された。

第二に、高等学校で実際に東南アジア教育がどのように行われているかについて、とくに世界史の事例をとりあげて理解できたことは大きな成果であった。高等学校によって扱いは異なるものの、必修科目の部分における東南アジア教育は、高等学校教員の側の東南アジア知識の薄さや、限られた時間数での他の地域史との関係等により、一般にはかなり限定的にしか取り扱われていない現状が浮かび上がった。これを改善するためには、東南アジア史に関わる歴史的人物像を具体的に描き出せるようなエピソード集の作成などの方策があることが示されたが、このような方針は大学授業においても展開することが可能であろう。

第三に、東南アジア教育にかかわる高大連携について真剣に考えている高等学校および大学の教員、さらには学習指導要領の作成にかかわってこられた先生方と意見交換ができ、また知己を得て今後の意見交換を実施する背景が得られたことも大きな成果である。

３．授業への研修成果の反映状況

昨日研修に参加したばかりでしかも学期末試験も終了した今日、報告者の授業においてすぐには研修成果が反映できないことはやむを得ない状況である。

しかし、来年度シラバスの作成においては、高等学校の学習状況により配慮する等、今回の研修成果は大いに活用できる。また今後の授業実践において、研修成果を積極的に取り入れていきたい。とくに基礎的知識のエピソードをふんだんに交えて授業実践や、基礎的知識の小テスト等を通じた徹底については、2010 年度から大いに授業に反映していきたい。さらには、今回の研修で得た知己との交流を通して、よりよい授業実践をめざしていきたいと考えている。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	企画・広報課長	係